メッセージ

四万十川があった土佐

四万十川カヌークラブ会長
河川環境保全モニター
西　内　燦　夫

23才のティムはＴＶカメラマン
16才のデイビットは高校生。
ふたりとも、カヌーは少し経験があるが、日本は初めて、四万十川も勿論初めて、と言う米国人である。
7月20日。雲ひとつない猛暑。この二人を連れて川下りをした。
私自身は通じるんだ、と一方的に信じている英語で、一方的に注意事項を言い放ち、
訳のわからん質問は一切無視しての出発だった。

出発間もなくは、真直ぐ進まなかったデイビットも、私のアドバイスが効いてかすぐに上達した。
「マッスグイク、ヒップ、ツイスト」
「スパゲテイ、ウドン、コシ　ショウブ　」
カヌーというのは、国籍、人種にかかわらず、指導さえ良ければ、年令が若いほど速く上達することが、
再確認されたまではいいが、デイビットの苦労に対しての、ねぎらいの心を込めた、
私の「褒め言葉」が通じなかったのは、日米友好のためにも、残念に思えた。
しかし、、、「褒め言葉」が通じないってことは、「アドバイス」も、、、か？

さて、四万十川名物の、沈下橋に通りかかったところ、地元高校生の一団が、
橋の上から飛び込みをしている最中だった。いたずら小僧のデイビットに
　　「Try　it　there　?#」
　　「YAHOO,,,,,,,,,,,,,,」
10名近くの若者が、「インターナショナル！　インターナショナル！」「ツギャザー！　ツギャザー！」
訳の解からない言葉を発しながら、橋の上から飛び降りる水音は、中村市三里の谷間に大きく響いた。
地元民の私は、遠来の観光客を乗せた屋形船の行き来する場所なので、
四万十川の持つべき「情緒」や「イメージ」を心配したが、、、、、、、、
この騒ぎには、周囲のキャンパー、アマチュアカメラマン、屋形船の観光客、そして、
吟行中の俳句会の一行までもが拍手喝采をしていた。

ここで二つ学んだ。
　観光は、その地方の歴史文化に触れ学ぶ姿勢も大事だが、まず「楽しくなければ、、」
　私の英語力より、若者同士の握手の方が、心が通じている。

まあ、とにもかくにも、カヌーによる川下りを二人は大いに楽しんだはずだ。ここは名高い四万十川だ。
「カヌー」の方が「飛び込み」なんかよりも、上品で、川の優雅さにマッチしている、、、
今回の旅行の最高は「カヌー」だったと、日記に書くだろう、、、と予測した。
そして、帰りついた二人からの感謝の言葉、、、
「KAYAKKING　オモシロイ」、、、フムフム、日本語少しは話せるな、、、
「JUMPING　サイコー」、、、ヨヨヨ、、

「最後の一言、余分だろうが、、、」
若者の心を理解できない地元民がここに居る。

一口メモ

～四万十川流域住民ネットワーク～

メッセージを寄せてくださった西内さんは、流域で活発に活動している「四万十川僻村塾」の運営委員長であり、同塾らが発起人となってＨ９年２月に結成された流域住民ネットワークの代表世話人でもあります。
構成団体数：２２（増加中）
目的・活動：個々の団体や個人の活動を母体にしながら、住民自らが主体となり、（愛媛県側まで含めた）流域での有機的なつながりを持った住民活動の展開。
窓口ＦＡＸ：０８８０－３４－１９６７

～四万十川情報～

四万十フレンドシップ倶楽部

個人・法人会員　大募集中！

（詳しくは四万十川対策室まで）

※お願い～マナーを守って～
　打ち上げ花火など音の出る花火は地元住民の睡眠の妨げになっています。キャンパーにとっては一夜のことでも、住民にとっては毎日のこと。
　高知県では、本年度、「四万十川の利用ルールづくり」を行うこととしています。